

会議結果報告書

令和2年1月20日

会議の名称	令和元年度第2回志木市複数・少人数指導体制推進事業検証委員会
開催日時	令和元年11月12日（火） 14時45分～16時00分
開催場所	志木市立志木第二小学校
出席委員	安原輝彦会長、豊島典子副会長、飯田昌利委員、可知良之委員、 (計 4人)
欠席委員	木下武久委員 (計 1人)
説明員職氏名	(計 0人)
議題	(1) スマート教員を活用した授業を参観して（感想等） (2) 全国、県及び市学力・学習状況調査の結果について (3) 第2回検証委員会幹事会（令和元年10月23日実施）の内容について
結果	別紙結果のとおり (傍聴者 7人)
事務局職員	柚木博教育長、土岐隆一教育政策部長、 北村竜一教育政策部次長、阿部剛学校教育課長 大木雄平指導主事

審議内容の記録（審議経過、結論等）

1 開会

2 議題

(1) スマート教員を活用した授業を参観して（感想等）

【会長】本日の授業を見ての意見を出してほしい。私もぜひ伺いたい。

【委員】

授業を1時間通して見られたわけではないので、私自身の思いになってしまう部分があるが、子どもたちがよく活動していたというのが第一印象。

算数は、子どもたちが2つに分かれていたので、どのような分け方をしていたのか。単純に2つに分けたのか、習熟度別に分けたのか。おそらく、単純に分けたのではないかと思った。子どもたちの考えを引き出しながら授業を進めているようであった。この場合、別の部屋で全く同じ内容の授業を行っているはずなので、指導者によって指導の質が違ったり、内容が変わったりしてしまうと、単純に2つに分けている場合は、2つが一緒になった場合にそれぞれの子どもたちに指導した内容がきちんと身に付いているかどうか課題となる。もう一方の授業も見られたらよかった。

【委員】

4年1組の先生から出てきた言葉で気付いたのは、「これは10時間で覚えてね」と言っていて、ちゃんと組み立てられているのだなと感じた。あと、「理科と社会で出てきたよね」と言っていたのを聞いて、単一の教科でありながら複数の教科が交差しているのだと感じた。その部分に、スマート教員が普段から担任とのコミュニケーションを取れていることにより、“他の教科で学んだことの応用編”というような働きかけが子どもにできるので、日頃から教科ごとの交差・交流を意識して話をするのがよい。

体育の授業では、教員の世界でこのような言い方をしてよいのかわからないが、得手不得手というものもあると思うので、今回担任とスマート教員との立ち位置の違いがうまく機能していたと感じた。

3年1組は、子どもたちが6つのグループに分かれて活動していたが、2人の教員が半分ずつグループに入って見られるということで、指導する側も指導しやすいのではないかと思った。

3つの授業それぞれが面白く、またどれも機能しているように感じた。

【委員】

4年1組では、Z会グループから派遣された先生が授業をしていた。子どもたちに考えさせる時間を多く取っていたが、学習塾での進め方なのかなと感じられる部分もあったように思えた。習熟の程度によって、それについていける子どもたちは面白く学習を進めていける一方、分け方や分ける集団によっては、担任の指導内容との差別化をどう共通理解

していけばよいのかと考えながら見ていた。

残る2人のスマート教員はベテランの先生なので、指導法も含めて若い先生方に伝えられる部分がある。

3年1組の算数では、36人で6グループ編成だったが、はかりがグループに1つずつしかない中で活動していた。もっとグループを小分けにしたり、2人の先生の立ち位置を考えたりして、子どもたちの活動を担保することも必要なのではないか。少人数学級の時は、もう少し少ない人数のグループで活動できていたが、せっきやく学級の人数が増えたのだから、多い人数を生かすような配慮も必要だったと思う。

授業のまとめを板書する時も、一方の先生が説明している間、もう一方の先生が黒板に書くなど、2人の役割分担や教育支援員との区別など、面白い部分と、精査しないとまったくない部分があった。

【会長】

委員の皆さんには、それぞれの観点でお話ししていただいた。私は、これまで県内のさまざまな授業を見ているので、そのことも頭に置いて、本日のスマート教員を活用した授業を参観しての話をする。

1つに、本日参観した3つの授業のパターンはそれぞれ違ったが、複数で指導にあたる良さを感じることができた。

例えば、4年1組の算数の授業では、受け身な感じがするという意見も出ていたし、もう1つの授業を見てみないと分からないという話もあったが、2年生の体育も3年生の算数も含めて、工夫の余地によってもっと可能性がある。

4年生の算数は、Z会グループで指導してきた若い先生が日頃から持っている知見、我々学校現場にないような何かがきつとあると思う。今日それが出たか出なかったかは別にして、我々が今求められている“主体的な学び”というものを、この先生が学び、研修を積んで獲得すれば、授業はもっと変わっていくだろうという可能性を感じた。

2年生の体育では、スマート教員のメンターのあり方において、こういう活動の仕方もあるのだと感じた。担任が若いので、ベテランのスマート教員のリズムの取り方や間合い、子どもの動かし方については、一緒に授業をやっていくことで学んでいけるのだなと面白く感じた。

3年生の算数を見ていると、どちらもベテランの域に達している2人の教員が、2つのグループに分かれて見ていく中で、担任は時間のコントロールをしながら、落ち着いてはかりの測定ができていなかった子の支援を行っていた様子を見て、こういったやり方もあるのだと感じた。はかりが少なかつたという意見もあったが、私は少ない中で逆にワイワイと6人で議論し、ああでもないこうでもないと言い合うような授業もありだと思う。もっとお互いに学び合うようになってよかった。我々がいたから、子どもたちが固くなっていたのかもしれないが、さらに子どもたちが自由に動いたら、2人の教員に質問できた

り、話し合いできたりしたのではないか。

いずれにしても、今後2人の教員がチームワークをどう構築していくかが重要だと思う。例えば、少人数の2つのグループに分けたときのチームワークのあり方、メンター的な、若い先生とベテランの先生とのチームワークの構築の仕方、2人のコミュニケーションの取り方、そしてベテランの教員同士で学びを深めていくとか、子どもたちの主体的な学びをどうつくっていくかを考えていくようなチームワークなど。それらについて、学校全体で研修などを通して、担任とスマート教員が一緒になって授業を進める、組織的な動きなどをどう構築していくか。その進め方によっては、この指導体制がすごく生きてくる。

逆に、そのような研修がない、コミュニケーションがうまく取れないといったことになると、1人で授業をした方がよいということになってしまう。先生方がそのように感じてしまうと、この事業に課題があるということになる。

今日は3パターンの授業だったが、場合によってはもっといろいろなパターンが考えられるのではないか。各学校において、スマート教員をどう生かして、どう授業を活性化させていくかアイデアを出せば、より事業の効果が期待できる。

また、派遣のスマート教員もそうでないスマート教員も、来年の4月から全面実施される新しい学習指導要領に掲げられている学びのあり方について、どこまで一緒に学んでいくかも今後は大事になってくる。

今日、3つの授業のパターンを見せてもらっただけでも、さまざまなスマート教員の生かし方があるのだと、あるいはこういった課題があるのだと見えたので、これから各学校で知恵をしばってもらえたら、子どもたちにとって面白い授業、子どもたちが喜ぶ授業がもっと出てくると感じた。

【委員】

算数などの校内研修などにたくさん入ってもらいながら、他の教員と一緒に研究を進めていけると、より一層スマート教員が伸びる。学校全体としても、スマート教員の生かし方を考えていけるのでありがたいと思うが、勤務形態の関係で必ずしも研修に参加できるか難しい面をクリアしていく必要がある。

共に学びながら力量を高めていくという過程は必要だと思う。

【会長】

学校においては、担任とスマート教員がじっくり話し合う時間をどう確保するかが現実的には難しいと思う。ただ、チームを組む2人が「こういう授業をやろうよ」といったようにコミュニケーションを取れると、すごい力になると思う。1+1が2ではなく、3にも4にもなる気がする。

【委員】

逆に言えば、オーケストラのように普段メンバーを組んでいなくても、ある程度の力量を持っている方であれば、少しの時間譜面を確認し合うだけで素晴らしい演奏をすること

ができる。

算数の授業の流し方に関して、問題を提示して自力解決を促すといった流れが学校としてあれば、その流れの中で効果的な指導ができるのではないか。そういった意味で、教員同士で高め合っていけるのがよいと思う。

【委員】

この事業がある一定のところまで至るのは大変である。学校現場において負担軽減が言われている一方で、スマート教員に限った話ではないが、新採用教員や臨時的任用教員も含め、全体で足並みをそろえていくのが大変だというのが実感である。理想なのは、さまざまな指導パターンの中から、子どもたちの実態や先生方の組み合わせなどから、各学校の実態に合うものを考えていくことだが、学校や学年に任せすぎていると、配置された教員だけで考えていくことに面白さもあるが大変な部分もある。

事業が始まったばかりという状況ではあるが、ベテランの先生が配置されていない学校もあったり、新卒のスマート教員もいたりするので、その辺りをどう調整していくか、効果的な活用をしていくのか。いくつも指導のパターンがあることを知って研修を積んでいく中で、指導の様子を見届けてくれる人も必要。現在、スマート教員のために推進員が学校に来て細かく指導しているので助かっている。このようなことが並行して行われないと、現場でスマート教員を有効に活用していくのは難しいと感じる。

【委員】

これが「日常のスマート教員」というものを今後確立していけると良い。本日見た姿はあくまでも4月から始まって2学期途中までの姿であり、これからも伸びしろが期待できる。子どもたちが、普通に授業を受けて楽しく学んでいた。大事なものは、大人目線だけでなく、子ども目線で授業を楽しく、なおかつ学んだ内容が身に付くことである。学校によって凹凸はあるかもしれないが、可能性を感じた。

【会長】

普段、スマート教員をどのように活用しているか、各校での取組状況（効果的な事例、うまくいかなかった例等）について、校長先生方の集まる場や研修会等でざっくりばらんに情報共有できるとよいのでは。学校独自というより、お互いの学校の情報をもとに考えていけると、徐々にではあるが事業の効果が高まっていくと思う。

【委員】

情報共有する場として、教頭先生も参加している幹事会がある。現場の先生方の声を柔軟に拾っていけることが必要。

【会長】

うまくチームが組めれば、また情報共有のやり方を工夫すれば、役割の分担が図られ、先ほど話に出ていた働き方改革にもつながってくるのでは。例えば、ベテランの教員の経験は、指導に悩んでいる若手のよい手本となる。逆に、若手が自分の色を出せないとなる

と課題ではあるが、若手とベテランがお互いの色を出し合うことで成長につながっていく。校長先生、教頭先生に音頭を取ってもらい、柔軟にスマート教員の活用を進め、組織力の向上を図っていけるとよいのでは。

【委員】

そのような方向に向かえるとよい。人間関係の部分は難しいので、日々気を遣っているところである。

授業に関しての負担軽減と言えば、テストの丸付けやノートの確認、教材作りといったところで担任とスマート教員とが役割を分担し、工夫して取り組んでいる。

担任とスマート教員との連携に関しては、人と人の部分なので、強いて言えばそれが一番難しいと感じている。どんな環境でもそうだが、特に組み合わせについては、実際にやってみないと見えない部分なので。

本制度の理想の形は理解できるし、良い部分もたくさんあるが、現実的に学年主任クラスのベテランが少なくなっている中で、そのような難しさを抱えながら取り組んでいる教員もいる。制度が成熟していき、いろいろな対処法が出てきてその難しさが減っていけばと思う。

【会長】

今までの意見のとおり、まだ始まって間もない制度なので、まずやってみて、うまくいっていることとうまくいかないことを蓄積し、情報共有をしていけば、よい方向に進んでいく。このようなことができるのは、私はうらやましいと思う。

【委員】

スマート教員も、他の教員と変わらないということで学校では日々取り組んでいる。10月11月で全教員の算数の授業を参観し、指導する機会を設けた際、スマート教員の授業も参観し、課題となる部分などを指導した。

スマート教員の授業はティーム・ティーチングの形式が多いが、そもそもティーム・ティーチングにおいてはT1、T2という主従があるわけではなく、場面に応じて役割を変えながらどちらも前面に立って指導するものである。ところが、参観した授業では、補助的な役割しか見えなかった。

さまざまな役割の中で、今後は評価が特に大事になってくる。新学習指導要領でも注目されている。評定ではなく評価、指導と評価を一体化した内容で子どもの様子を見ていき、つまづいているのであればそこで個別指導につなげていくというのが、スマート教員に与えられた役割である。評価の部分においては、スマート教員は大きな力になるのではないかと、将来的な展望として考えている。その部分がうまくいけば、クラスを2つに分けるだけでなく、1つのクラスに2人の評価者がいるという形を極めていくとよいのではないか。

【委員】

例えば、低学年の生活科の授業で町探検に出かける際、3クラスを4つの方向に分け、その1つをスマート教員が担当するために、下見や打ち合わせにも携わるといった少人数指導のパターンが最近多くなってきた。1年生では、生活指導の場面でスマート教員が入って2つのグループに分かれ、トイレの使い方やロッカーの使い方を指導するというケースもある。さらに低学年の体育の授業では、2つのグループに分けることで、前後半で活動内容を変えたり、共通で活動したりするといった具合に工夫している様子も見られた。このように、さまざまな分け方ができるのもこの制度の利点だと感じた。

【会長】

注意しなくてはならないのは、スマート教員はあくまでも補助的な役割であって、担任のもつ責任とはまた重さが違うのではないか。担任の考えのもと、子どもたちの学びが広がったり深まったりする、あるいは負担軽減につながるといった部分で担任を助けてくれる存在がスマート教員だという認識である。

チームを組む場合、先ほどの意見にあった評価の場面に関して、最終的に決定するのは担任であり、スマート教員は“こういう評価もできる”といったように別の視点で担任を支えていくという認識である。チームワークみたいなものを大事にしながら、スマート教員も含めたチームで活動していく中で、指導の効果が高まり、負担軽減も図れるというのが一番である。

少人数で指導した方がよい場面と、ティーム・ティーチングで指導した方がよいという場面があるわけだが、チームで活動していく、チームワークを大事にするという部分がぶれなければ、さまざまな可能性が広がる制度だと思う。

【委員】 柔軟性がある制度である。

【委員】

算数の授業において、クラスを分けるのと同じ感覚。実際に、2クラスを3つに分けたり、3クラスを4つに分けたりして指導している学年がある。

スマート教員は支援員とは違うので、少人数に分けた集団の指導にあたるという役割を担っている。

【会長】

学校組織として、教員の中に、現在はスマート教員と一緒に授業をする機会がないが、自分だったらこうするとか、自分の学年ならこう活用するといった意識が出てくるなど、組織的なつながりをどう育てていくかということも、柔軟な活用をしていくうえで大切である。

まだ出発したばかりの制度なので、これからも各学校において活用の仕方を工夫してもらいたいと思う。

(2) 全国、県及び市学力・学習状況調査の結果について

【会長】事務局より説明を求める。

【事務局】

※資料の3ページを開くよう伝える。

小学校1年生から3年生を対象とした学力調査は、昨年度新たに始めたものである。

1、2年生は国語、算数ともに全国得点率を上回っているが、3年生は下回っている。この事業の目的の1つに低学年段階の学力のつまずきを補うことがあるが、この結果から課題が改めて浮き彫りとなった。

県の学力・学習状況調査では、学年が上がるにつれて正答率が上がっているが、特に6年生については国語、算数ともに県平均を上回った。

県学力・学習状況調査は、児童一人一人の学力の伸びを図る調査であるが、5年生から6年生にかけての算数の学力の伸びが、市内全体で8割弱の児童で見られた。複数指導体制が学力の伸びをもたらしているものと捉えている。

全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに全国、県の平均を上回っている。

各学校において、それぞれの学校の結果を分析し、具体的な取組につなげていると、先日開かれた幹事会において幹事から報告を受けている。各学校の取組が、子どもたちのために生かされることを期待している。

※資料の4ページを開くように伝える。

第1回検証委員会でも示した、県学力・学習状況調査の質問紙調査について、昨年度と今年度の比較ができる資料である。

例1「先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、自分の考えを伝えることができているか」について、学年が上がると数値が下がっている。グループ活動の中で、自分の意見を話す機会を増やすことで、自信をもって話すことができるのではないかと考えている。

例2から5については、「主体的、対話的で深い学び」に係る質問で、決して低い数値ではないが、日頃より先生方がこの項目を意識した授業を展開することにより、より数値が上がり、ひいては学力向上につながると考えている。

【会長】事務局の説明に対し、質問などはあるか。

【委員】

市の学力・学習状況調査については、今年の1月に実施したので、この数値は昨年度までの少人数学級だったときのものである。その後1月に実施する調査の結果によって、今後検証していくことになるという確認でよいか。

【事務局】それでよい。

【会長】市独自の学力・学習状況調査で、全国のデータというものがあるのか。

【事務局】

調査を委託している民間のものを活用したので、同じ調査を行った全国の学校の数値と

比較できるということである。

【会長】

県学力・学習状況調査で、現5年生と昨年の4年生、現6年生と昨年の5年生と一昨年の4年生の経年変化を追っていきけるようなデータはあるのか。

【事務局】 ある。

【会長】

今回示されているデータは、単純に平成31年4月の4年生、5年生、6年生の結果ということか。

【事務局】 その通りである。

【会長】

全国学力・学習状況調査の結果は、今年の6年生が4月に受けた結果ということか。

【事務局】 その通りである。

【会長】 県学力・学習状況調査は、経年で結果を追っていった方が分かりやすいのでは。

【事務局】

先ほどの説明のとおり、伸び率は概してよい。あとは、経年で結果を分析していく。

【会長】

同じように、質問紙調査の結果も、今年の5年生が昨年度4年生だった時にどうだったのかを経年で追っていった方がよいのではないか。同じ子どもたちを追っていくことで、事業改善の視点にもつながるのではないか。

【委員】

この前、学校運営協議会の際に、結果についての説明があった。説明の中で、校長が「すべての教科の基本は国語だ」と言っていたことが印象に残っている。

【委員】

言語活動はとても重要である。話すこと、書くこと、書かれているものを見ることによって、思考につながる。思考も言語を介しているので、言語を中心的に扱う国語はとても重要だと思う。読書量の多い子は学力が高い、という数値も出ているくらいなので。

国語の授業をしっかり進めるよう先生方に伝えているし、話している言葉も1つ1つ大切に扱ってほしいと伝えている。丁寧というか、言葉を選びながら、語彙を増やしていけるように。まさしく、「国語は大事」である。

本事業を通して、国語の力も伸ばしていけるとよいと思う。

【委員】

子どもたち一人一人の話す回数、全体で話したりグループで話したりする機会を増やしていけるとよいのでは。また、聞くこと、書くことは時間のかかることである。

少人数から大勢になったときに、たくさんの考えを聞いたり、さまざまな考え方を知っ

たりすることができるのは、この制度に変わった利点である。一方、教員一人で多くの子どもたちに対応しきれないところで、スマート教員が入ってじっくり関わり、めあてをもって取り組むといった計画がないと、ただわいわいしているだけでは大切な力は付かない。利点と課題を理解したうえで、どう取り組めばよいのかを考えていけるのが良い。

【会長】

人間は言語で話して、言語でイメージしていく。豊かな言語感覚を持っている子とそうでない子とでは、語彙力や発想力が違ってくる。

最近話題になっている「読解力」について、「読解力＝国語」と思っている人が多いが、実はそうではないのではないかと。国語ができれば読解力が身に付くということではないということ、教員はもう一度見つめ直さなければならないのではないかと。

例えば、算数の論理的な解釈と国語の言語的な表現活動が合わさったとき、読解力がさらに深まっていく。そのようなことが、最近さまざまところで研究されている。

ある本の読解力調査を実際にやってみたが、意外に難しく、間違えてしまう。そういう意味では、豊かな学びの条件とか、学びの機会とかに触れてみるのは大事なことである。スマート教員に限らず、いろいろな教員との出会いやいろいろな教材との出会いが、子どもたちの力を付けることにつながる。

正答率を見ていて1つ心配なのは、ドリル的に反復練習に取り組ませて本当に伸びるのかどうかということである。全国学力・学習状況調査や県学力・学習状況調査を見ていると、思考的な部分が多くて、これが今の子どもたちに求められている力だと感じている。3年生には3年生なりに、6年生には6年生なりにどう読解力を身に付けさせていけばよいのか、これは難しい課題である。学力・学習状況調査を行うと正答率に目が行きがちだが、どんな問題がどんなねらいで出されたのか、子どもたちにどのような力が試されているのか、先生方が関心をもつとよいのではないかと。

【委員】

先ほどの報告の中で、5年生から6年生にかけて多くの子どもたちが学力を伸ばしているという話があったが、それはなぜかということが次に生かされていくのではないかと。

【会長】

実際には、そういった柱になる部分を飛ばして、点数が上がる取組をしているということがあるようであるが、そこで膨大な無駄を生み出しているのではないかと。宿題をたくさん出して取り組ませることが、本当に子どもたちの学力を伸ばすことにつながるのか。

【委員】

その部分が、いろいろ心配されている塾講師の派遣ということにつながっていると思う。ただ、そうではない部分もあるはずなので、それを理解したうえで派遣スマート教員と一緒に進めていくのが良いと思う。

【会長】

民間の教育事業者の方では、学力を伸ばす専門的なノウハウを持っているはずなので、それを生かして読解力、理解力、論理力とはどのような力なのかといった話題について学校現場の先生方と議論していくことは絶対マイナスにならない。

(3) 第2回検証委員会幹事会（令和元年10月23日実施）の内容について

【会長】 事務局より説明を求める。

【事務局】

※資料の5ページを開くよう伝える。

幹事会の開催に先立って、各小学校の幹事の先生から主に3つの点について報告を提出してもらった。

「自校の学力向上プランに基づくスマート教員の活用」については、どの学校も算数での活用が多くされているという報告であった。ティーム・ティーチングだけではなく、先ほど委員から話のあった2つのクラスを3つのコースに分けて指導を行う、1つのクラスを2つのコースに分けて指導を行うといった少人数指導にも取り組み始めたという報告があった。そして実際に、さまざまな学力層の児童の学力定着が図られているといった報告もあった。

「民間の教育事業者との連携」については、中学年に配置されているので、中学年の算数において活用しているという報告があった。また、派遣スマート教員に限らずだが、スマート教員の特性を生かし、外国語活動や他の学習活動における支援を行い、子どもたちの力を伸ばしているという報告もあった。ただ、限られた時間の中で打ち合わせの時間をどうとったらよいのかという悩みがどの学校にもあるという報告も出された。

「この事業の効果をより高めるための意見」については、打ち合わせの時間を確保して子どもたちに質の高い指導をしていきたいという意見や、経験のある教師、教師としての力量をある程度期待できる教師を派遣してもらいたいといった意見が出された。また、市で採用しているスマート教員と派遣スマート教員とで、できることに違いがあり現場としては混乱しているので、整理して伝えてほしいという意見もあった。

※資料の8ページを開くよう伝える。

幹事会における協議の中で出された課題や要望については、大きく分けて3つのことが出された。この点について、今後も幹事の先生方から意見をもらい、現場の声を生かしながらより事業の効果を高めていけるような検証を進めていく必要があると考えている。

【会長】

打ち合わせの時間がほしいという意見だが、打ち合わせの時間が取れないということに関して、事務局としてはどう捉えているか。

【事務局】

中学年の児童の下校は4時近くになるため、そこから打ち合わせをしようとする、勤務時間はわずかしかなかった状況になってしまう。1日の流れの中で、時間をどう確保していくかを見出すのがまず難しいのではないか。

【委員】

ここここで時間が取れそうだから、少しでも進めていく。そういった方法でないと、現実的には打ち合わせができない。

【委員】

低学年は下校が早い曜日があるので、何とかできる場合もある。あとは、週1回学年会ということで設けている。高学年であれば、専科授業の時間をうまく生かして打ち合わせすることもできるが。

【会長】 小学校ならではの悩みだと感じる。

【委員】

中学年は、ただでさえ持ち時数が多く、常に授業に出ている感じになっている。来年度はさらに授業時間が1時間増えるので、根本的に改善するのは難しいのではないか。

【委員】

という状況なので、現場のことを熟知していたり、ある程度自分で動ける資質を持っていたりする教員が配置されていると問題が軽減されるのではないか。打ち合わせの時間に、スマート教員へ1から指導していくとなると、それだけで時間が足りなくなる。

現場では細かい部分に気を遣う場面が多いので、打ち合わせの時間を十分にとるか打ち合わせの時間をそれほど取らなくても臨機応変に動ける教員を配置するか、二者択一ではないがその辺りがこの事業のポイントではないか。

【会長】

「夏休み中の勤務について見直しが必要」という幹事からの意見があったが、例えば夏休みの最初と最後の1日のうち半日、じっくり3時間ぐらいかけて、これまでの反省とこれからのことの打ち合わせができたとすれば、変わると思うか。

【委員】

できる教員はできると思う。他の教員も含めて、学期全体という長いスパンを考えて指示が出せるかどうか。もしかするとそのことの方が課題かもしれない。現場には、若い教員が増えてきているので、経験という点では本採用教員とスマート教員とあまり変わらない。

【会長】

この課題については、即効性のあるやり方がなかなか見つからない部分もあるので、各学校で工夫しながら進めていくしかないと思う。

スマート教員の活用について、なぜ算数が多いのか。スマート教員は算数に入らないとしないとしているわけではないと思うが。

【事務局】

中学年において国語や算数におけるつまずきが多く見られることから、教育委員会としては国語や算数を中心という趣旨で事業を進めている。ただ、本日の授業で体育を指導していたように、各学校の実態に応じて柔軟に対応できるようにしている。基本的には、国語や算数がつまずきやすい教科という前提でやっている。

【会長】

確かに、教科の授業時数は国語や算数が圧倒的に多い。

「国語や算数を中心に」という説明であったが、国語と算数ではどちらが多いか。

【委員】 圧倒的に算数が多い。

【会長】

先ほどの協議の内容でいくと、国語を中心に配置していこうということになってもよいと思うが。

【委員】

これまでの学校現場においては、少人数指導やティーム・ティーチングは圧倒的に算数が多かった。現場の感覚からすると、算数の方が入り込みやすかった部分がある。国語も研究していけば、いろいろな方法が出てくると思う。国語における少人数指導の研究が、あまり進んでいないということではないか。

【会長】

実は、国語に力を入れたら、学力が伸びる可能性があるのではないか。

前に、大学院生と一緒に、小学校と中学校の全国学力・学習状況調査の問題を解いてみたことがあった。算数・数学の問題で、子どもたちがどんな問題につまずくか考えてみたところ、まず問題文が読み取れないという話になった。計算はできるが、文章題になった途端、特に中学校の問題は条件がたくさん出てくることから、「計算力の問題ではなく、文章をきちんと読み取れないのではないか」という意見が学生から出てきた。

であれば、「国語＝読解力」ではないのだが、読解力を伸ばしてあげれば、国語も算数も学力が伸びるのではないかと思った。そういった研究を進めてもらえると、何か発見があって面白いのではないか。

【委員】

学力が伸びる時というのは、学ぶのが楽しい、“この問題解きたい、やりたい”と思っているなど、前のめりになって学習に取り組んでいる時である。そのきっかけとして教材研究は、子どもにいかに関心をもたせて、学習内容に入り込めて、考えたことによって“わかった”“面白い”と思わせるようにするのが勝負である。その点を大前提として、例えば少人数指導によって子どもたちの興味を引き出すようにするなど少人数指導における利点と、大人数の中でお互いの考えを伝え合いよりよいものを目指すなど一斉指導における利点を組み合わせていくことが必要である。どの教員も、子どもたちが興味をもてる授

業を行うために、教材研究を深めていくといった大事なことを進めるのに、この事業をどう絡めていくかが見えていけばよいのではないか。

【会長】

今の意見のとおりだと私も思う。子どもたちが身を乗り出すような授業をどう作っていくか、そこが出発点となればこの事業の今後の未来が拓けてくると思う。

小学校において、社会科の研究はあまり行われていないが、スマート教員を活用した社会科の授業研究を進めてみると、社会の事象に興味をもって自分の世界が広がる子どもが増えるのではないか。

時間が来たので、進行を事務局に返す。

7 その他

特になし

8 閉会